

## 『研究ノート』

### 伝覚如書写本

### 『無量寿経論註』について

辻 本 俊 郎

はじめに

世親 (Vasubandhu、紀元5世紀) の『無量寿経論』(『往生論』『浄土論』『無量寿経優婆塞戒論生偈』などともいう。題名に関しては拙稿(二〇〇〇)、『無量寿経論』テキストの検討(『佛教大学仏教学会紀要』第八号参照されたい)を注解した曇鸞(四七六～五四二?)著『無量寿経論註』(『往生論註』『浄土論註』『無量寿経優婆塞戒論生偈並註』などともいう以下、『論註』とする)諸本に関しては真宗本願寺派宗学院編『古写古本真宗聖教現存目録』(一九七二)などに記載されている。

また、真宗勸学寮編『浄土論註校異』(一九二五)には、親鸞加點本を底本とし、建保本、高野山寶寿院本、

山口県常満寺本、龍谷大学寛永本、明暦本、義山本、長圓寺本、神興本、金陵刻経處本の九本を対校し、その「例言」の中に簡単な書誌解説がある。

さらに、『浄土宗全書』所収の『論註』には、義山本を底本として用いられている。浄土真宗聖典編纂委員会『浄土真宗聖典七祖篇——原典版——』には、親鸞加點本を底本とし、対校本として高野山寶寿院本、山口県常満寺本、龍谷大学寛永年間本、龍谷大学元禄十年刊本、『七祖聖教』所収本の五本を用いており、これにも簡単な書誌解説が付されている。

しかし、ここで取り上げようとする佛教大学図書館所蔵伝覚如(一二七〇～一三五二、親鸞末女寛信尼の孫、本願寺第三代)書写本『論註』はいずれも底本、対校本として用いられるところか紹介すらされていない。唯一、佛教大学総合研究所代表香川孝雄編(一九九九)『佛教大学総合研究所紀要別冊「浄土教の総合的研究」』の研究報告平成七年度の中で佛教大学国枝利久教授、岸一英教授が鑑定した結果報告のみである。それによると、「その書体から見て、覚如の書ではなく、室町時代の写本ではないか」と結論づけているにすぎない。したがって、小論で佛教大学図書館所蔵伝覚如書写本『論註』を

取り上げ、考察する次第である。

## 一 伝覚如書写本『論註』の書誌概略

(装幀) 粘帖装

(用墨) 墨

(界線) なし

(体裁) 半葉六行十七字(十六字、十八字も見られる)

(紙幅) 縦二四・五センチメートル、横一六・五センチメートル

(題) 外題(左上) 往生論註上下二卷

内題(上巻 左上) 論註(下巻 左上) 論註

(尾題) なし

(本文) 全体一筆 訓点あり

(奥書) 続高僧傳云末詳其氏鴈門人家近五臺山神迹靈

怪逸于民聽時末志学便往尋焉備觀遺蹤心神歛

悦

上巻 覚如上人真筆墨附五十三枚斤六百三十

五行

下巻 覚如上人真筆墨附六十二枚斤七百四十

五行

- ・ 外題と内題で書名が異なる。
- ・ 本文中の書き入れあり(校正のうえでの加筆訂正)。
- ・ 本文中に返り点あり。
- ・ 本書の伝来を示す所有者の墨書などは見られない。
- ・ 所蔵を示す所蔵印は佛教大学蔵書貴重書。

## 二 内容の検討と特徴

佛教大学図書館所蔵伝覚如書写本『論註』の内容を親鸞加点本『論註』との字句の異同によって紙幅の都合上、特に文意の異なる箇所や興味深い箇所二十一点を取り上げて検討する(括弧内は便宜的に真宗勸学寮編(二九二五)『浄土論註校異』のページ数を記す)。

### 一、(上十六ページ)

- ・ 伝覚如書写本「余若恭譯」
  - ・ 親鸞加点本 「余若參譯」
- 前者は「私がもしも恭しく訳せば」となり、後者は「私がもしも訳に参加すれば」という意味になる。いずれも文意は通る。

### 二、(上十八ページ)

- ・ 伝覚如書写本「入寶池如水入坎」

・親鸞加點本 「入寶地如水入坎」

訳を付すと前者は「まるで水の中に吸い込まれるように宝の池に入っていく」となり、後者は「まるで水の中に吸い込まれるように宝の地に入っていく」となる。どちらも文意は通るのであるが、「水の中に吸い込まれるように」というたとえからすると伝覚如書写本の読みの方がより文意にかなうと考えられる。

三、（上二十四ページ～上二十八ページ）

伝覚如書写本では「之事く用准阿弥陀如来舒臂為言」が欠けている。これは親鸞加點本の七十四行分に相当する。内容的には「莊嚴大義門功德成就」の後半部分、「莊嚴一切所求満足功德成就」、「是故願生彼阿弥陀仏国」、「莊嚴座功德成就」、「莊嚴身業功德成就」の前半部分であり、かなりの部分にわたって欠損しているのである。

四、（上二十八ページ）

- ・伝覚如書写本 「縁眼色空」
  - ・親鸞加點本 「縁根色空明作意五因縁生」
- 前者は「〔眼識が生ずる時〕眼（眼という感覚器官）・色（対象）・空（空間）によって〔生ずる〕」となり、後

者は「〔眼識が生ずる時〕根（感覚器官）・色（対象）・空（空間）・明（光明）・作意（見ようとする意志）の五

つの因縁によって生ずる」となる。『論註』の各テキストを見ると後者の読みが正しい。「眼」と「根」とは旁が同じであるために伝覚如書写本は誤写したのではないだろうか。もっとも伝覚如書写本の底本自体がすでに「眼」となっていた可能性も否めない。

五、（下二ページ）

- ・伝覚如書写本 「無量壽經優婆塞捨願生偈 婆藪槃頭菩薩造並註卷下 沙門曇鸞註解」

・親鸞加點本 「無量壽經優婆塞捨願生偈註卷下」

六、（下四ページ）

- ・伝覚如書写本 「般若波羅蜜」
  - ・親鸞加點本 「般若波羅蜜」
- これはサンスクリット語の *paramitā* の音写語であるから伝覚如書写本は明らかに誤っている。

七、（下五ページ）

- ・伝覚如書写本 「不正得奢摩他」
  - ・親鸞加點本 「不正得奢摩他名也」
- 訳を付すと前者は「正しく奢摩他を表しているとはいえない」となり、後者は「正しく奢摩他の名を表

しているとはいえない」となる。文脈からすると「止」という語句の説明に関することであるので伝覚如書写本の読みは不適切であるといえる。

八、(下六ページ)

・伝覚如書写本「初器界分中又有三重」

・親鸞加点点本「器分中又有三重」

前者は「〔器世間（仏国土）と衆生世間（仏および菩薩）の中で〕初めの器世間を三つの意義に分けて説く」となる。それに対して後者は「器世間を三つの意義に分けて説く」となる。ともに文意は通ずる。

九、(下七ページ)

・伝覚如書写本「諸經説言」

・親鸞加点点本「諸經統言」

前者は「諸經に説いて言う」となり、後者は「諸經に統べて言う」となる。

十、(下七ページ)

・伝覚如書写本「一者衆生多小不可思議」

・親鸞加点点本「一者衆生多少不可思議」

十一、(下九ページ)

・伝覚如書写本「十一者莊嚴聲功德成就」

・親鸞加点点本「十一者莊嚴妙聲功德成就」

「妙」という字の異同である。この文は『論』本文である。そこで『論』諸テキストを見るに宋版、元版、高麗再雕版などは「十一者聲功德成就」となっており、「妙聲」となっているのは『論註』に引用されている『論』のみである。これについては、辻本俊郎（一九九九）『無量寿經論』テキスト考』『無量寿經論校異』佛敎大学総合研究所を参照されたい。

十二、(下九ページ)

・伝覚如書写本「十七者莊嚴一切所求功德成就」

・親鸞加点点本「十七者莊嚴一切所求満足功德成就」

十一に採り上げた文と同様にこの文も『論』本文である。そこで『論』諸テキストを見るに宋版、元版、高麗再雕版などは「十七者一切所求功德成就」となっており、『論註』に引用される『論』では「十七者莊嚴一切所求功德成就」となっており、ここでは伝覚如書写本の読みを支持している。

十三、(下十四ページ)

・伝覚如書写本「周満世界」

・親鸞加点点本「周遍世界」

「満」と「遍」との字句の異同であるがどちらも文

意は変わらない。

十四、(下十六ページ)

・伝覚如書写本「得因縁則生」

・親鸞加點本「得因縁即生」

「則」と「即」との字句の異同。どちらも「条件が整えば〔芽を〕出すようなものである」となる。

十五、(下二十ページ)

・伝覚如書写本「是故次觀佛主」

・親鸞加點本「是故次觀主」

前者は「そこで次に仏〔国土の〕主を觀察する」となり、後者はそこで次に「仏国土の」主を觀察する」となる。

十六、(下二十三ページ)

・伝覚如書写本「既言无知故无所不知无所不知者」

・親鸞加點本「既言无知故无所不知若无所不知者」

両者とも「既に無知であるからこそ、知らないところがないという。知らないところなければ、云々」となる。

十七、(下三十五ページ)

・伝覚如書写本「計百歳之長」

・親鸞加點本「計百歳之高」

訳を付すと前者は「百年経った〔樹の〕長さを計れば、云々」となる。それに対して、後者は「百年経った〔樹の〕高さを計れば、云々」となる。

十八、(下四十ページ)

・伝覚如書写本「一者器世間清淨」

・親鸞加點本「一者器世間清淨」

「世間」と「世間」の異同。これは明らかに伝覚如書写本が誤写である。

十九、(下四十ページ)

・伝覚如書写本「向説十七種莊嚴成就佛土功德成就」

・親鸞加點本「向説十七種莊嚴佛土功德成就」

この文は『論』本文である。したがって、『論』テキストを見るに、宋版、元版、高麗再雕版などは「向説十七種佛國土功德莊嚴成就」となっており、『論註』に引用される『論』が「向説十七種莊嚴佛土功德成就」となっている。伝覚如書写本では「莊嚴」という語句が重複しており、誤写であると考えられる。

二十、(下五十一ページ)

・伝覚如書写本「以得此菩提以得此菩提故」

・親鸞加點本「以得此菩提故」

これは明らかに伝覚如書写本が「以得此菩提」の語句を重複誤写している。

二十一、(下五十三ページ)

・伝覚如書写本「如是等名為他力遇哉」

・親鸞加點本「如是等名為他力愚哉」

親鸞加點本の読みでは「このようなはたらきを他力という。おろかなことではないか」となる。伝覚如書写本では文意は通らない。

## まとめ

以上、伝覚如書写本『論註』を親鸞加點本のそれと対照させて検討した。ここで一応の結論を述べておく。伝覚如書写本『論註』の奥書には「覚如上人真筆墨附」云々とあるが、覚如自身が「覚如上人真筆」と記すとは到底考えられない。また、前述したように書写年代の記載もない。さらに伝覚如書写本『論註』は誤写と考えられる箇所も多い。しかも、本願寺第三代である覚如は『論註』を書写したとして、その際親鸞加點本のそれを参考に、あるいは底本として参照したと考えるのが自然

であるが、前節で検討したように両テキストの行取りや字句・語句の異同がある。つまり、たとえこの書が覚如真筆だと仮定しても親鸞加點本を底本としていないことは明らかである(その場合、そこにはいかなる事情があったのかという新たな問題点も浮上してくる)。

そして、京都国立博物館(一九九八)『五〇〇回忌東西合同特別展覧会 蓮如と本願寺——その歴史と美術——』には覚如筆「上宮太子御記」などが紹介されているがその字体を比しても、もちろん覚如の書写年齢なども考慮にいれなければならないが、覚如の字体とは異なるようである。

すなわち、ここでは「覚如の書ではない」という国枝教授、岸教授の説を支持することになる。しかしながら、この写本が「書体から見て室町時代のものである」という見解に対してはどのような根拠があってこのように結論づけたのかは明らかではなく、検討の余地があると思われる。これに関しては現在云々する準備がないので別の機会に論じたい。また、本書の翻刻に関してもかなり大部になるので紙幅の都合上別の機会に報告したい。

(東洋文化学科 平成二年卒業)